漱石山房記念館だより

第3号

令和２年３月15日発行

CONTENTS

特集 【インタビュー】夏目漱石と能 …… 2
下掛宝生流能楽師　安田登氏
展示報告 …… 4
活動報告 …… 5
漱石山房記念館所蔵資料の紹介 No.3 …… 6
津田青楓「漱石先生読書閑居之図」
香日ゆらの漱石山房記念館訪問記 …… 7
INFORMATION …… 8

漱石公園・道草庵

猫の墓（猫塚）

特集

夏目漱石と能

インタビュー
interview

下掛宝生流能楽師 安田 登氏

——安田さんはワキ方の能楽師でいらっしゃいますが、文学作品の朗読公演も精力的に行い、しばしば漱石作品を取り上げていらっしゃいます。そんな安田さんが漱石作品と出会ったのはいつ頃のことだったのでしょうか。

安田 教科書レベルはさておき、本格的に読むようになったのは大学卒業後、教職に就いてからのことです。大学では中国文学を専攻していたので、国文学はあまり読みませんでした。でも、教員になった以上、一度はきちんと読む必要があると思い、真っ先に手にとったのが漱石でした。やはり「近代文学＝漱石」というイメージがありましたし、ちょうどその頃に新書版漱石全集の刊行が始まったのがよい契機になりまして。新刊が出る度に購入しては読み進めたものでした。

——多彩な漱石作品の中から、安田さんはどのようにして朗読作品を選ばれるのでしょうか？

安田 声に出して読むとより面白さが際立つ作品です。実は、「吾輩は猫である」や「倫敦塔」などの初期作品は黙読よりも音読に向いているんです。そして、それは彼が謡曲を習っていたことが大きく影響していると思います。

——漱石が習っていたのは、安田さんが所属している下掛宝生流の謡ですね。これはどのような特徴がある流派なのですか？

安田 能にはシテ方とワキ方があり、それぞれ芸が異なります。下掛宝生流は宝生流のワキ方の流派で、江戸時代前期に成立しました。ワキ方の謡は、できるだけ平板に、立て板に水が流れるようにさらさらと謡うものとされていますが、下掛宝生流の謡はリズムや音の高低の変化が他流派よりも複雑なのが特徴です。漱石は、十世宗家・宝生新に師事しました。

——漱石作品のうち、謡の影響が顕著に感じられるのはどの部分ですか？

安田 文体です。一般的に言文一致体は落語の影響で成立したとされています。しかし、漱石の、特に初期作品からは謡独特のリズムが色濃く感じられるのです。謡の文章は、声に出して初めて真価が理解できるようなところがあるのですが、漱石の文章にも読者に音読を期待していたのではないかと思われる節があります。「夢十夜」はその最たるもので、文中に特別な指示はないものの、音読すると「間」を入れるのが当然という文章になっています。「吾輩は猫である」も音読した方がより面白味が感じられるんですよ。

——テーマ自体に能の影響が見て取れる作品はありますか？

安田 「草枕」ですね。あの作品では、主人公の画工に「しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に出逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう」と言わせています。「草枕」の旅は能の旅であり、また作品全体を一本の能として見ることができます。面白いことに、「草枕」を読破した人にラストシーンを覚えているかと尋ねると、ほとんどの人が覚えていないんです。これってとても能的だと思いませんか？ 能はクライマックスの後は静かに舞い収め、何事もなかったかのように退場していきます。「草枕」のラストもそんな感じです。

また、作中で「小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤を引くように、ぱっと開

Profile

安田 登（やすだ・のぼる）
昭和31（1956）年、千葉県銚子生まれ。
下掛宝生流能楽師。高校教師時代に能と出会う。ワキ方の重鎮、鏑木岑男師の謡に衝撃を受け、27歳で入門。現在は能楽師のワキ方として国内外を問わず活躍し、あうるスポット『能でよむ～漱石と八雲～』やNHK『100分de名著 平家物語』など、能のメソッドを使った作品の創作、演出、出演、講演も行う。『日本語を生かすメリハリ読み　漱石で学ぶ「和」の朗読法』（春秋社）、『能 650年続いた仕掛けとは』（新潮新書）、『異界を旅する能』（ちくま文庫）、『身体感覚で『論語』を読みなおす。』（新潮文庫）など著書多数。『論語』などを学ぶ寺子屋「遊学塾」を、東京・広尾の東江寺を中心に全国各地で開催している。

けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」と登場人物に語らせていますが、能も舞の一部を取り出して「仕舞」として演じることがあります。一部に全体のエッセンスが入っていると考えるのは、とても能的だといえるでしょう。

——能の要素には謡のほかに所作もあると思いますが、その観点からはいかがでしょうか。

安田　本日お話をするために諸作品を読み返していて気づいたのですが、初期の小説は身体的な動きから始まることが多いんです。「坊っちゃん」は「二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。」、「二百十日」は「ぶらりと両手を垂げたまま、圭さんがどこからか帰って来る。」、「草枕」は「山路を登りながら、こう考えた。」という具合です。ところが、「三四郎」では冒頭いきなりうとうとしていますし、「門」は始まって早々に縁側で横になってしまう。「それから」に至っては目覚めのシーンで始まります。そして、「彼岸過迄」になると運動そのものが嫌になってしまっている。つまり、どんどん身体性から離れていくのです。これがどういう意味を持つのか、今はまだ結論が出ていないのですが、読解のヒントになりそうなのが「夢十夜」の身体表現です。

第一夜では腕組みをするシーンが三度出てきます。なぜ漱石は「腕組み」を多用したのか。その答えは、英国ヴィクトリア朝の詩人・テニスンの詩の中にあるのではないかと私は考えています。テニスンは熟考の象徴的表現として「腕組み」を使っています。漱石はこの手法を自らの小説に取り入れたのではないでしょうか。これは近代の日本人が新たな西洋的仕草を身につけたことを意味しています。つまり、漱石が目論んでいた近世の超克は、小説作法だけでなく、小説内の身体性にも現れていると考えられるのです。意識的になされたかどうかはわかりませんが、あれだけ執拗に同じ動作を繰り返させるのだから、何らかの意味はあるはずです。

一方で、同じ動作の繰り返しは能に通ずる部分もあります。能の仕草はすべて「型」に従うけれども、型一つ一つに象徴的な意味があるわけではありません。"象徴"は西洋の文化です。能の動きは抽象で、状況によって同じ動作からでも異なる意味が立ち現れます。第三夜では、歩いては立ち止まり、という動作が三度繰り返され、立ち止まるごとに場面が変わっていきますね。これは大変に能的なアプローチです。つまり、「夢十夜」には西洋的な新しい身体表現と、日本の伝統的身体表現が共存していると考えられます。ところが、後期になればなるほど身体性そのものが失せていき、軌を一にするように「則天去私」というキーワードが浮かび上がってきます。このリンクはとても興味深い。

——能楽師である安田さんならではの漱石作品の読み方ですね。

安田　もう少し考察を続け、まとまったら形にしようと思いますが、百年以上前に発表された作品にまだまだ新たな読み方の可能性が見出だせるのですから、さすがは夏目漱石、ですね。

展示報告

《通常展》テーマ展示
漱石と高浜虚子 ―「吾輩は猫である」が生まれるまで―

令和元年12月3日（火）～令和2年2月24日（月・休）

令和元（2019）年は、昭和34（1959）年に85歳で亡くなった、俳人・小説家の高浜虚子没後60年という節目の年でした。当館ではこれにちなみ、テーマ展示「漱石と高浜虚子―「吾輩は猫である」が生まれるまで―」を開催しました。

漱石と虚子は、明治25（1892）年に松山で出会い、正岡子規を介して俳句を通して関わることになりました。虚子が発行を担った雑誌『ホトトギス』には、俳句をはじめ、多くの漱石の作品が掲載されました。また、漱石と虚子といえば、漱石の小説家としてのデビュー作「吾輩は猫である」の誕生のきっかけを虚子が作ったことは良く知られています。

今回の展示では、「正岡子規と高浜虚子」、「漱石との出会い」、「『ホトトギス』と漱石」、「「吾輩は猫である」の誕生」、「俳句の道へ」の各コーナーを設け、漱石と虚子の歩みを両者のつながりに注目しながら追っていきました。

高浜虚子の資料を所蔵している虚子記念文学館のご協力により、多くの展示資料をお借りしました。漱石が松山から熊本に移る際、広島まで同行した虚子に漱石が贈った俳句短冊をはじめ、漱石から虚子に宛てた手紙や虚子が作成した記録類を展示しました。なかでも「吾輩は猫である」の原稿は、連載した第9章、第11章の冒頭と、猫が水がめに落ち、念仏を唱えながら成仏していく様子が描かれている第11章の最終部分を展示することができました。

この他にも、『ホトトギス』に掲載された漱石作品一覧、漱石門下生の『ホトトギス』掲載作品一覧などのパネルや、初期の漱石作品を掲載した雑誌『ホトトギス』の展示は、漱石の基礎的な情報として今後も活用できるものと考えています。

また、この展示会に合わせて作成した展示図録には、本展示をご指導いただいた、立教大学名誉教授・石崎等氏による論考も掲載しています。

今回の展示により、漱石と虚子の深い、そして複雑な関係を垣間見られたのではと考えています。最後になりましたが、この展示会にご協力いただきました皆様にあらためてお礼申し上げます。

協力 公益財団法人虚子記念文学館

展示図録『漱石と高浜虚子―「吾輩は猫である」が生まれるまで―』ミュージアムショップで好評販売中！

予告

《通常展》テーマ展示
越後の哲学者 松岡譲（ゆずる） ―人と作品―

令和2年4月16日（木）予定～令和2年7月5日（日）

新潟県にある松岡山本覚寺（しょうこうざんほんがくじ）の長男として生まれた松岡譲（1891～1969）は、寺の後継者として期待されながらも、文学の道を選び、漱石に関する著作を含む数々の作品を世に送りだしてきた作家です。

大正5（1916）年、東京帝国大学哲学科在学中の松岡は芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、成瀬正一と第四次『新思潮』を創刊、同誌に数々の作品を発表し、文学活動を本格的に開始します。

同時期に漱石門下生のひとりとなり、漱石から「越後の哲学者」と名付けられましたが、漱石没後はその長女筆子と結婚したことにより、一時創作の筆を折ります。その後執筆活動を再開、大正12（1923）年に出版した長編『法城を護る人々』が大きな反響を呼び、ベストセラーとなりました。小説や随筆を執筆する傍ら、漱石亡き後の夏目家を支え、漱石の研究にも力を注ぎました。

本展示では、代表作『法城を護る人々』『敦煌物語』などの著作や、当館が所蔵する「松岡・半藤家資料」から芥川龍之介や津田青楓ら漱石門下生との関わりを紹介し、その生涯と文学活動を概観しています。今回の展示を通じて、「松岡・半藤家資料」の中に含まれていた松岡の原稿等の資料を初めて公開しますので、ぜひご観覧にお越しください。漱石記念館では引き続き、「松岡・半藤家資料」の整理と調査を進めていきたいと考えています。

協力 関口安義氏（都留文科大学名誉教授）

ギャラリートーク　担当学芸員による展示解説

日時｜4月18日、5月2日・16日・30日
6月13日・27日
土曜日　13時～（20分程度）

会場｜漱石山房記念館2階資料展示室

申込｜不要（観覧券が必要です）

活動報告

イベント報告

第１回文学さんぽ「漱石忌にちなんで雑司ケ谷霊園へ」

令和元年 12 月 9 日（月）

12 月 9 日の夏目漱石の命日にちなんで、雑司ケ谷霊園の夏目漱石の墓を訪ねました。「夢十夜」の第六夜に登場する護国寺仁王門からスタートし、漱石山房記念館ガイドボランティアによる解説のもと、菊池寛旧居跡などを巡りながら雑司ケ谷霊園へ。中村是公（なかむらよしこと）、大塚楠緒子（おおつかくすおこ）、ケーベル、森田草平（もりたそうへい）など漱石ゆかりの人物の墓を巡り、最後に夏目漱石の墓を見学しました。

これからも 12 月 9 日には夏目漱石の墓を訪ねる文学さんぽを実施する予定です。今回ご参加いただいた方でも楽しめるようなコースを検討したいと思いますので、ぜひご参加ください。

2 月 9 日朗読会

令和 2 年 2 月 9 日（日）

新暦 2 月 9 日（旧暦では 1 月 5 日）の夏目漱石の誕生日を記念して、漱石にまつわる作品の朗読会を開催しました。日頃、漱石山房記念館で活動されている、神楽坂朗読サロン、ふみのしおり（新宿歴史博物館ボランティアガイド朗読の会）、近代文学をたずねて～沙羅の木～、フォーエバーリーディングの 4 団体の皆さまがご出演くださり、にぎやかに誕生日を祝う朗読会となりました。

参加者からは「バラエティに富んだグループでそれぞれに味があり楽しめました」という感想をいただきました。

漱石山房記念館ではこれからも毎年、誕生日を祝う朗読会のほか、様々な朗読会を企画したいと思います。

新宿区のイベント

令和元年度 新宿区夏目漱石コンクール表彰式

令和元年 12 月 14 日（土）

漱石山房記念館講座室にて、令和元年度新宿区夏目漱石コンクールの表彰式が行われました。本コンクールは、全国の小中高校生を対象に、読書感想文作品と絵画作品を募集するもので、平成 26 年度から始まり今回で 6 回目を迎えました。当日は、受賞者 21 名のほか、保護者・関係者の皆さまにご出席いただきました。

読書感想文部門、絵画部門の受賞作品やコンクールの詳細は、新宿区公式ホームページからご覧いただけます。

令和 2 年度新宿区夏目漱石コンクールは、6 月下旬頃より各作品の募集を開始する予定です。

漱石山房記念館一日館長イベント

令和 2 年 1 月 12 日（日）

直木賞作家の出久根達郎氏を漱石山房記念館の一日館長としてお迎えしました。任命式を行った後、館内の展示を視察、漱石山房記念館の正面玄関で、来館者の皆さまに手書きの名刺を配りながら、お出迎えのご挨拶もしていただきました。また、講演会では「漱石先生の魅力」というテーマで、移動図書館で漱石全集に出会い、手紙の書き方や人との話し方を学んだことや、漱石には文豪・スポーツマン・俳人・詩人・画家・市井人・作家の 7 つの顔があるとして、それぞれの魅力を語っていただきました。

ミュージアムショップ

ミュージアムショップでは、ここでしか買えないオリジナルグッズを販売しています。この冬の新商品をご紹介します。

俳句短冊 夏目漱石自筆（2 種類）：各 1800 円（税込）

当館所蔵の夏目漱石の俳句が書かれた短冊を、原寸大で再現しました。「すみれ程な小さき人に生れたし」と「菊の花硝子戸越に見ゆる哉」の 2 種類があります。

漱石の言葉 日めくりカレンダー：1200 円（税込）

1 日から 31 日まで、毎日一つずつ漱石の言葉を日めくりで味わう卓上カレンダーです。このカレンダーで取り上げた言葉は、漱石山房記念館の 2 階「漱石の言葉」で展示しているものに新たな言葉を加えたものです。曜日が入っていない万年カレンダーですので、4 月からの新生活のお供にいかがでしょうか。

CAFE SOSEKI
カフェ・ソウセキ

●おすすめメニュー

柿アイスクリーム
￥480（税込）

漱石作品『それから』に登場する山林王のモデルとなった帝国大学の教え子が漱石に贈った、広島名産の祇園坊柿をたっぷり練りこんだ、ミルクベースのアイスクリーム。

CAFE SOSEKI では、明るく爽やかな雰囲気のなか漱石ゆかりのメニューを楽しむことができます。漱石の作品や関連書籍を手に取りながら、ゆっくりお過ごしください。
営業時間：10 時～ 17 時 30 分（ラストオーダー 17 時）

漱石山房記念館
所蔵資料の紹介

No.3

津田青楓「漱石先生読書閑居之図」

今年は画家・津田青楓（1880～1978）の生誕140年にあたります。青楓は漱石山房で催された木曜会に出席した漱石の門下生の一人で、『道草』や『明暗』などの装幀や漱石の絵の先生もつとめました。漱石は朝日新聞の挿絵画家に青楓を推薦したり、絵を購入したりと親身になって青楓の画業を支え、画家として敬意を払って接しました。青楓も漱石を慕い、その死に際して「死床の前にて慟哭す。父との死別に涙いでざりし我なるに」と自伝に記しています。

今回ご紹介する作品は、青楓が大正10（1921）年の秋に漱石山房を描いた、縦140センチ、横34・7センチ（本紙）の紙本・墨画淡彩の掛軸です。本作と同じ構図の作品は、高知県立文学館にも所蔵されています。画面右上に漢詩を添え、太湖石や遥か雲上に山々、屋内にはくつろぐ母子、ベランダには読書する漱石がやさしい雰囲気で描かれた南画山水です。注目すべきは、漱石が好んで植えさせた芭蕉と木賊（とくさ）、次男がよじ登ってセミを捕った太い青桐、秋になると数え切れないほどの実をつけた柿の木、芥川龍之介が呼鈴の釦を探すのに苦労した蔦、年々見事に大きく枝を広げて咲いていた萩など、漱石山房を知る人の記憶に残る草木が丁寧に描かれていることです。

添えられた漢詩は漱石が、亡くなる約2か月前の大正5（1916）年9月30日に詠んだ七言律詩です。漱石の娘婿で青楓とも親交が深かった松岡譲はこの詩を次のように解説しています。

「しづかな窓の下、午睡から覚めると、緑の木影がさしてゐる。目障りになる何ものもなく、ただ一つ机の上には筆があるのみだ。多病の文士の身には秋もしみわたり、苦心想をねつてゐると、寒さが肌をつんざく思ひがする。埃つぽいこの世の中にも聖賢の道があり、青空高い空中には清浄の詩があるのである。それらを筆取り上げて書き出しては見たが、ふとつかえた。しばらく息ぬきに東籬の下に立つて、行く雲を看、又菊を採らう。」

青楓は95歳で描いた「漱石先生像」にもこの詩を添えています。青楓にとって漱石を象徴する詩だったのでしょう。一見ほのぼのとした中に、文豪の理想と現実が描かれたこの漱石山房図は、漱石をよく知る青楓ならではの作といえるのではないでしょうか。

閑窓睡覚影参差　机上猶余筆一枝　多病売文秋入骨　細心構想寒砭肌
紅塵堆裏聖賢道　碧落空中清浄詩　描到西風辞不足　看雲採菊在東籬

（漱石山房記念館学芸員　鈴木希帆）

参考文献
津田青楓『自撰年譜』私家版、一九四〇年
松岡譲『漱石の漢詩』十字屋書店、一九四六年

香日ゆらの 漱石山房記念館訪問記

香日 ゆら（こうひ・ゆら）
漫画家。青森県生まれ。趣味で描いていた漱石とその門下生についての漫画が出版社の目に留まりデビュー。著書に『先生と僕～夏目漱石を囲む人々～』全４巻『漱石とはずがたり』全２巻（KADOKAWA）、『夏目漱石解体全書』『先生と僕　青春篇／作家篇』（河出書房新社）など。その他漱石関連の書籍の装画や寄稿、企画展のポスターなども手がける。

INFORMATION

表紙の写真から

表紙の写真は、漱石山房記念館に隣接する新宿区立漱石公園の「猫の墓（猫塚）」です。「吾輩は猫である」のモデルとなった猫は明治41（1908）年9月13日に死んだため、漱石山房の裏庭に埋葬されました。この石塔はその猫の十三回忌にあたる大正9（1920）年に、夏目家で飼われていた生き物たちを供養するため、漱石の長女・筆子の夫である松岡譲が造らせた塔で、台石には画家の津田青楓が描いた猫、犬、鳥が刻まれていました。しかし、昭和20（1945）年の空襲で漱石山房が焼失した際に損壊し、現在の石塔はその残りを利用して昭和28（1953）年に再建されたものです。

昭和3（1928）年撮影の猫の墓
松岡譲編著『漱石寫眞帖』昭和4（1929）年より

漱石公園には2本の大きな桜（ソメイヨシノ）の木のほか、季節の花々が植えられています。お花見がてら、猫の墓にもお立ち寄りください。

今号は漫画家の香日ゆら氏に、イラストエッセイ「香日ゆらの漱石山房記念館訪問記」を描いていただきました。漱石山房記念館には以前にお越しになったことがあるとのことでしたが、今回あらためてご来館いただき、この秋から1階の再現展示室横に設置している「漱石人形」など、以前との違いも含めてご紹介いただいています。イラストエッセイの中には、館内の順路を誘導している「猫」がたくさん登場していますので、当館へお越しの際には同じ猫がどこにいるか、探してみるのも楽しいと思います。1匹だけ「犬」もいますので、展示を観覧しながらぜひ見つけてください。

次回の『漱石山房記念館だより』は令和2年7月頃発行の予定です。また、バックナンバーは漱石山房記念館のWebサイトで順次公開しております。

令和2年4月～令和2年9月 イベントカレンダー

※日程等は変更になる場合があります。詳しい内容や応募方法は当館ウェブページ等で順次お知らせします。

4月

漱 4月16日(木)予定～7月5日(日)
《通常展》テーマ展示
越後の哲学者 松岡譲 ―人と作品―

6月

漱 日時未定
文学講座（「門」発表110年関連講座）※要事前申込

区 募集期間：6月下旬～9月中旬
新宿区夏目漱石コンクール作品募集
（読書感想文・絵画）

7月

区 9日(木) 16時～17時30分
第1回 九日会 ※要事前申込
講師：阿部公彦氏（東京大学大学院教授）

漱 14日(火)～9月6日(日)
《通常展》夏休みテーマ展示 夏目家の人々（仮）

漱 21日(火)～8月23日(日)
夏休み子ども向けイベント
ミステリークエスト

8月

漱 1日(土) 時間未定
夏休み子ども向けイベント　ブックトーク

漱 2日(日) 時間未定
夏休み子ども向けイベント　読書感想文講座
※要事前申込

9月

漱 15日(火)～11月8日(日)
《特別展》津田青楓生誕140年記念展（仮）

漱 26日(土) 14時～16時
漱石山房記念館 開館3周年記念講演会
※要事前申込

漱 日時未定
夜間特別開館イベント　※詳細未定

問合せ先

漱…漱石山房記念館
TEL 03-3205-0209　FAX 03-3205-0211

区…新宿区文化観光課文化資源係
TEL 03-5273-4126　FAX 03-3209-1500

Access

【電車】東京メトロ東西線「早稲田駅」1番出口より徒歩10分
都営地下鉄大江戸線「牛込柳町駅」東口より徒歩15分

【バス】都営バス（白61）「牛込保健センター前」より徒歩2分

※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

- 所 在 地…新宿区早稲田南町7番地
- 休 館 日…月曜日（月曜日が休日の場合は、直後の休日でない日）、12月29日～1月3日
- 開館時間…10時～18時（入館は17時30分まで）
- 入 館 料…一般300円、小中学生100円、団体（20人以上）は半額、特別展開催時は別途定める

新宿区立漱石山房記念館
TEL：03-3205-0209　FAX：03-3205-0211　https://soseki-museum.jp/
編集・発行　新宿区立漱石山房記念館（公益財団法人新宿未来創造財団）